文化庁委託事業

「令和２年度障害者による文化芸術活動推進事業
(文化芸術による共生社会の推進を含む)」

事業報告書

こんにちは、

共生社会

ぐちゃぐちゃ の ゴチャゴチャ

db
Dance Box

一人一人互いに受け止め合う寛容で多様性のある社会を、
自らの足元から立ち上げていこうという本プロジェクト。
2年目となる今年度は、障がいをもつ人、国籍のちがう人、地域の人々、という
3つの入口から、当事者と共に企画を立ち上げることから始めました。

新型コロナウィルス感染拡大は全世界で止まらず、
会って話すことが叶わなかった上半期は、特に見えない人、聴こえない人との
オンラインミーティングの方法を考えるところからのスタート。
情報が正確に伝わることと同時に、
そのパーソナリティまでもが届く豊かなコミュニケーションがどうすれば成立するのか、
いわゆる企画を立ち上げる以前の所にも多くの時間を費やし、
そのプロセスそのものが、互いに理解を深める重要な時間だったと感じています。
一緒に何ができ、それがどのようになっていくと面白いのか、何を大事にしたいのか、
それぞれのチームで延々と話す時間が続きました。

2度目の緊急事態宣言が発令された年度の後半は、
予定していた事業をすべてオンラインのフェスティバルとして
一括して実施することに変更しました。
障がい、国籍、地域というカテゴリーも、
舞台芸術と生活文化も「ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ」にした
【MISCH MASCH Festival】は、
MCもスタッフの大半も出演者も新長田の地域の人が参画し、
様々な障がいを持つ人々を含め、皆で舞台を共有する現場は、
その状況そのものが、一つの理想的な風景でした。

この後に続く報告は、それぞれ何度も企画の延期・変更を繰り返し、実際に実施できた事業です。
継続性のあるプログラムも、イベント型のものも、内容は様々ですが、
この一つ一つが、関わった人それぞれの生活や活動に繋がり、
イベントが終わった翌日以降もそのマインドが続いていることを願います。

CONTENTS
目次

03 【Let's Dance with Sokerissa！】映画「ダンシングホームレス」上映会
ソケリッサと踊ろう！Dance Workshop with Sokerissa

04 大人からはじめるバレエ<女性限定>
はじめての西アフリカの伝統舞踊
はじめての韓国舞踊
大人からはじめるヨガ<女性限定>
子ども・はじめてのバレエ
なぜ多言語発信!?(横堀ふみ)

05 劇場へようこそ！２０２０～ドント・ストップ・ダンシング編～
子どもたちが劇場体験をする意味について(中西ちさと)
参加者アンケートより

06 やさしいコンテンポラリーダンスクラス
2/11のみMISCH MASCH Festivalのプログラムとして開催
継続してクラスをおこなう意義と、来年への展望(西岡樹里)
参加者の声

07 サイレントシアターこと始め
第一部:「SHUWACHAN BARRIER CRASH」上映
第二部:Let's TRY!サイレントなトークディスカッション!?
【MMF】サイレントシアター「ミル+オドル=ココロオドル」

08 「今年一年の試みについてどう感じるかと、来年への展望」
(中川綾二、三田宏美、松島亜希)

09 インクルーシブ・ダンス・ワークショップを考える
～イギリスでの実践から～

10 リサーチの記録

11 【MMF】オープニング

12 【MMF】身体的な差異を越えたM.A.D.E.プログラム(独)について
【MMF】Thikwa+Junkan お久しぶりトーク

13 【MMF】視覚ラボ
今回の試みについて思うこと(武内美津子)
マルジナリア「目を閉じて。ときの音遊歩」

14 【MMF】エレナの家族でワークショップ！
【MMF】新長田の旧正月巡り
長田らしい多文化共生の今とこれからに思うこと(パクウォン)

15 【MMF】AZUMI PIANO@はっぴーの家ろっけん

16 【MMF】視るダンス①②③　助成:神戸市

17 【MMF】大谷燠のお茶の間トーク①②③

18 【MMF】副音声の試みについて

19 【MMF】村川拓也『Pamilya (パミリヤ)』記録映像上映＋
『Pamilya (パミリヤ)』をめぐるクロストーク

20 【MMF】クロージング

21 【MMF】耳からダンス
踊ってみたレポート(小堀結香)
MISCH MASCH Festivalとは

22 今年度の流れ

2020年08月12日(水)13:30-15:40

【Let's Dance with Sokerissa！】映画「ダンシングホームレス」上映会

当初、2日間のワークショップとショーイングを予定していましたが、新型コロナウィルスの影響を受け、講師の来神が叶わず。ソケリッサを追ったドキュメンタリー映画の上映と、オンラインワークショップに変更となりました。急遽、映画の上映に変更したことで、自身が踊ることには抵抗がある人も参加できました。上映後のトーク、ワークショップは、東京の代々木公園にいるソケリッサの皆さんとオンラインで繋いで実施。緑いっぱいの公園の風が 上田假奈代さんの詩と共に、長田の劇場に流れ込んできて、日々の稽古場に一緒に参加したような、開放的な場となりました。

会場：ArtTheater dB KOBE
配給：東京ビデオセンター
共催：NPO法人こえとことばとこころの部屋cocoroom

2021年1月24日(日)14:00-16:00

ソケリッサと踊ろう！ Dance Workshop with Sokerissa

今回もソケリッサのメンバーは来阪できず、アオキ裕キさんのワークショップを、アートエリアB1からオンラインで配信しました。参加者は、各地の自宅や屋外から参加。アオキさんの言葉のナビゲートで、心と身体を開いていきました。オンラインですが、画面越しの参加者から参加者へのダンスの受け渡しなど、リアルでの接触は難しい時期でしたが、オンラインの距離感が、より個々の解放を促したようです。その後、上田假奈代さんを交えてのトークでは、コロナ禍でのそれぞれの活動について話しました。

会場：アートエリアＢＩ(オンライン)
共催：アートエリアＢＩ、
　　NPO法人こえとことばとこころの部屋cocoroom

劇場の広さをいかし、感染対策に気をつけながら、ダンスを楽しむ時間をつくりました。その中でも「大人からはじめるバレエ＜女性限定＞」は毎週火曜に開催し、現在に至るまで継続しています。踊る楽しさを存分に味わいながら、身体と心をほぐしていくことを目的に、バレエ、西アフリカ伝統舞踊、韓国舞踊、ヨガの４種類のクラスをラインナップしました。講師はすべて新長田在住／勤務の方にお願いしました。小さな地域のコミュニティの中でも、世界中の多様なルーツにつながるダンスに触れる事ができる、そのことが顕在化しました。

2020年6月より、毎週火曜日10:00-11:30
大人からはじめるバレエ＜女性限定＞
講師：中間アヤカ

2020年8月30日（日）11:00-12:00
はじめての西アフリカの伝統舞踊
講師：アラン・シナンジャ

2020年9月1日（火）、15日（火）、10月13日（火）、27日（火）
11月24日（火）、12月1日（火）、15日（火）13:00-14:00
はじめての韓国舞踊
講師：趙恵美

2020年9月1日、15日（火）10:00-11:30
大人からはじめるヨガ＜女性限定＞
講師：Mona

2020年8月29日（土）
10:00-11:10 小学校に行く前の子ども
11:15-12:00 小学生
子ども・はじめてのバレエ
講師：千葉聡佳

COLUMN

「なぜ多言語発信!?」横堀ふみ

2020年6月、第1回目の緊急事態宣言が明けて、一番初めに開催した事業が「大人からはじめるバレエ＜女性限定＞」でした。全く先行きの見えない中、息長くこの状況に対応できるように、自身の身体に＜ひとりで＞向き合う時間が必要だと思い、企画を進めました。劇場がある商店街の入り口に立て看板を置き、チラシを置きました。参加者の方々は、このチラシを見て参加してくださる方が殆どで、これまでこの劇場の存在すら知らなかったと。そして、このような時間を切実に欲している人々はもっといるはずだと思ったのでした。

話は変わりますが、私の子どもが1歳のころ、「おむつ替えの場所あり」の文言が記載されたダンス公演情報を見つけました。「子連れで行ってよいのだ！」と大層ホッとし、すぐに予約して公演鑑賞を楽しんだ記憶があります。文言一つで、そこへ行くためのハードルが下がることがあるのだと、痛感したのでした。

今回、多言語で発信できるチラシを制作することで、「参加してみよう！」と思える人が少しでも増えたらと願いました。結果、子どものバレエクラスに、ベトナムにつながる子ども達が参加しました。帰り際、ベトナム出身のお母さんは「子どもにいろんな体験をさせたいのです。またよろしくお願いします。」とおっしゃった。伝え方や、多言語発信においては、まだまだ課題は残りますが、継続して地道に取り組みたいと思います。

2020年9月17日（木）
参加者：福祉事業型「専攻科」エコールKOBEの学生13名
映像配信：2021年2月13日（土）～2月28日（日）

劇場へようこそ！２０２０
～ドント・ストップ・ダンシング編～

「劇場へようこそ！」は、ダンスボックスにとってコロナ禍初の劇場公演となりました。参加者、演者、スタッフの安全と健康を第一にコロナ対策を徹底するため、新たなストーリーや設定を取り入れプログラムの内容や演出を大きく刷新しました。参加者は、ダンス作品『ファーブル先生へ』の鑑賞後、突然現れた劇場の怪人による魔法を解くため、グループに分かれてバックステージで数々のダンスミッションに挑戦。最後は、舞台上でダンスミッションでの体験をダンスで披露しました。また、子ども目線で撮影した当プログラムの短編映像を2月に開催した「MISCH MASCH Festival」で配信しました。

振付・演出・構成：中西ちさと　脚本：筒井潤
出演：西岡樹里、藤原美加、新家綾、福井菜月、内田結花、庄波希
米澤百奈、筒井潤、中西ちさと、田舞志緒里、中川萌香、野村王雅
舞台：米澤百奈　照明：三浦あさ子、茂木紀恵　音響：西川文章
衣装：清川敦子、川上瞳

COLUMN

「子どもたちが劇場体験をする意味について」

中西ちさと

劇場は、日常と非日常を行き来できる場所です。客席に座り暗転すると、普段体験できない完全な闇。照明がつくとまるで別空間に飛ばされたように感じ、目の前で行われる生身の人間による踊りの迫力に圧倒されます。それはTV等の画面越しには体験できないものです。今年度の公演はコロナウィルス蔓延により公演が少なくなる中の上演だった為、普段から舞台を見る私ですらその迫り来るような肉体の力強さに改めて圧倒されました。また劇場は、スタッフやダンサー、観客と多くの違う人間が交流する小さな社会のようです。子どもたちだけで探検し、舞台に立つことは少しの自立と冒険心を育て、表現することの喜びを知るきっかけになるでしょう。

福祉事業型「専攻科」エコールKOBEの参加者の皆さんからのアンケートより

・もう全部が楽しかったです。まずダンスを見た時の様子はとても迫力があってキレッキレのダンスでした。かなりの興奮だったので僕もあれみたいにもっと踊りたいです。

・体験の方では、やっていくうちに段々と楽しく踊れました。劇場でダンス踊れる事はとても貴重な体験だったので、とても良かったです。

・ミッションもクリアできたことがうれしいし、最初ダメかなと思ったけど、びっくりしました。

【ArtTheater dB KOBE】10:30-12:00
2020年10月4日(日)、18日(日)、11月8日(日)、29日(日)、12月13日(日)
2021年1月17日(日)、31日(日)、2月11日(木・祝)、28日(日)、3月14日(日)
【ONLINE】
2020年10月24日(土)、11月21日(土)
2021年1月17日(日)、31日(日)

やさしいコンテンポラリーダンス

※2/11のみMISCH MASCH Festivalのプログラムとして開催

障がいのある人も、踊ったことの無い人も、安心して踊ったり、その場に居ることのできる場が継続してあることを大切にして、実施しました。未就学児から高齢の方まで、それぞれがダンスの楽しみ方や、その場へのかかわり方を見つける時間となり、劇場という場所でゆるやかなコミュニティが生まれてきました。MISCH MASCH Festivalに向けて、音楽家の江南泰佐さんをお迎えし、音楽の時間も3回実施。楽器ではないものでの音を楽しんだり、音の移動に耳を澄ましたり、身体と音を聴きあう豊かな時間がひろがりました。

講師：西岡樹里
音楽：江南泰佐(1月、2月のみ)
アシスタント：藤原真希

COLUMN

「継続してクラスをおこなう意義と、来年への展望」

西岡樹里

クラスを実施して改めて感じたことは、様々に異なる私たちに共通することは＜違い＞を持っているということでした。その違いをクラスの出発点に、必要なダンスのルールや、どんなダンスを愉しみ合えるのかを模索していきました。今後も継続することでルールの開発をより深め、多様な人が踊る場を開いていきます。

そして私たちの＜違い＞を含んだこのダンスの場が、まだ見たことのない景色へと繋がって行くことを共に愉しみたいと思います。

参加者の声

Yさん：最初に名前を全員で呼んだりして、クラスに受け入れられたような感じがして、その後の活動に積極的に参加できるようになったと思います。私自身ダンスに対する苦手意識や固定観念に縛られて今まで自由に体を動かすことがあまりできなかったのですが、ナビゲーターの方のポジティブな言葉かけやクラスの多様性を受容する雰囲気が心地よくて、とてもびのびと体を動かすことができました。

Nさん：普段、人に注目されたくなくて、いつも自己主張をないがしろにしている私でしたが、このワークショップの空間では、見られている(見ている)んだけど、何も間違いはない、全てが許容される空間であったのがとても過ごしやすく、動きやすかったです。それだけ人の心と体を動かす素晴らしいワークショップでした。ダンスへの導入もとても丁寧で、徐々に身体の世界へと誘われていくようでした。自分の身体との対話、人の動きの観察。全てを楽しむことが出来ました。

2020年10月17日(土)14:00-16:00

サイレントシアターこと始め
第一部:「SHUWACHAN BARRIER CRASH」上映
第二部:Let's TRY!サイレントなトークディスカッション!?

聴こえる人・聴こえない人のどちらかがマジョリティになるのではなく、その間のありかたを探るトライアルな企画の第一弾。短編映画「SHUWACHAN BARRIER CRUSH」を鑑賞した後、トークとディスカッションを声と手話無しで行いました。参加者にはスケッチブックとマジックペン、オペラグラスが配られ、基本は筆談。司会や進行も、発話無しのパフォーマンス形式で行われました。最後は、参加者が書いた膨大な言葉をバトンで吊り上げて眺めるという、劇場ならではの演出が施されたプログラムとなりました。聴こえる人聴こえない人の判別不要な場が立ち上がりました。

企画メンバー:中川綾二(oioi)、松島亜希(アート補聴器「十彩」)、
三田宏美、田中幸恵、文

2021年2月11日(木)15:00-17:00

【MMF】サイレントシアター
「ミル+オドル=ココロオドル」

Zoomに入って劇場とダイレクトに双方向に対話する参加方法と、YouTubeライブ配信を視聴し、状況を客観的に見るという2通りの参加方法で実施しました。基本的に音も発話も手話も無し。Zoom参加者にも劇場にいるメンバー同様、A4サイズくらいの紙と太いペンを準備していただきました。前半はソロダンス・パフォーマンスをサイレントで鑑賞して、アフター筆談義。音声は無いですが、手書きの文字は情報量が多く、Zoomの画面越しにとても賑やかで活発な筆談義が繰り広げられました。後半は、劇場からの配信ならではの<光>で踊る時間。蛍のようにライトが描く線や、劇場のカラフルでリズムのある舞台照明に合わせて好きに踊ってみる試み。次はこれをライブで開催したいと考えています。

Zoom参加、もしくは、YouTubeライブ配信の視聴
企画メンバー:中川綾二(oioi)、松島亜希(アート補聴器「十彩」)、
三田宏美、田中幸恵、文
ダンス:西岡樹里

COLUMN

「今年一年の試みについてどう感じるかと、来年への展望」

中川綾二（oioi）

音声言語に一切頼らない形で進行するワーク自体は難しさと共にやりがいを大いに感じましたし、音声言語を使っていると「煩わしさ」を感じるような方法でも、ワークの中ではその感情を乗り越えると「心地よさ」に変わっていく発見がありました。
本ワークを通して、コロナの影響でコミュニケーションのあり方が変化している中で、「視覚的なコミュニケーション」の可能性を大きく感じられました。
まずは、この取り組みが今後も継続されることを期待します。そして、日常生活に戻った時に「視覚的なコミュニケーション」の心地よさを継続的に味わいながら、それが当たり前のようになされる社会形成に向けて、さらなるワークを展開していきたいです。

三田宏美

withコロナの新しいぐちゃごちゃに放り込まれた今年度。音声認識ソフトを使用したオンライン会議、全員筆談での打合せ等、コミュニケーションの在り方を様々な方向から探りなおす一年でもあったと思います。その中で試みたオンとオフのふたつのサイレントシアター。声も手話もNGというサバイバルの中で、自然にサイレントならではの身振る舞いや作法めいたものが立ち現れて共有されていったのが、人間の適応性や創造力の強さといったものを感じて、とても印象的でした。オンラインフェスで実施した各種鑑賞バリアフリーはじめ、今後当事者とブラッシュアップする中で、ダンスの新たな視点や可能性を共に拓いていけたらと願っています。

松島亜希（アート補聴器「十彩」）

【「コロナ」もぐちゃごちゃメンバーとして共存したサイレントシアター】コロナと言うとマイナスなイメージもありますが、このサイレントシアターにおける取り組みの中では、斬新なアイデアを生み出すキッカケともなったという印象です。その場にいない参加者にも届けられる表現・パフォーマンスとは？という事を考えて向き合った取り組みは、より濃く、よりおもしろく、深みを増した世界への道やパフォーマンスの可能性を強く感じました。もっと踏み込んだその先にはまだ見ぬ新しい展開や気づきがたくさんある事でしょう。色々な気づき・可能性を味わい、発信できる取り組みと、そのメンバーやｄＢスタッフの皆様に心より感謝いたします。

2021年1月15日(金)14:00-16:00

インクルーシブ・ダンス・ワークショップを考える ～イギリスでの実践から～

イギリスを拠点に、知的障がいのあるダンサーのみで構成するAnjali Dance CompanyやStopGap, Independance, Paragon などの数々のインクルーシブダンスカンパニーと活動してきたAya Kobayashiさんを迎えて、ワークショップとレクチャーを行いました。前半では、Ayaさんが普段行っているエクササイズを参加者とともに行い、後半では、Ayaさんがワークショップやパフォーマンスを組み立てる時のプロセスや、気をつけている点についてシェアしていただきました。振付やエクササイズの質と同様に、ワークショップの組み立て方や、言葉の選び方も重要であることを再認識する2時間でした。

Zoomにて開催
講師：Aya Kobayashi
協力：クリエイティブ・アート実行委員会

レクチャーより抜粋

はじめて行くクラスでは、まずは一人ひとりに会いに行くようにします。30人でも、40人でも、全員とまずは握手をして、その人たちがどういう人たちなのか、エネルギーを感じ取ります。人との出会いなので。

私が普段やるエクササイズは、インクルーシブダンスのために作ったものではないんです。プロフェッショナルなダンサーにも同じことをします。複雑に説明したり、トーンを変えてみたり、もう少し特殊な話をしてみたり。レベルは違うかもしれませんが、ダンスのアイデア自体は変えません。知的障がいのある人と、簡単でシンプルな動きをやることは、上から目線な気がして。私も彼女たちもダンサーとして、同僚として、向かって行きたいです。

私がよく協働するRosemary Leeという振付家が「作品を作るのであれば、踊っている人と、観ている人へのインパクトが同じでないといけない。やってる方だけが楽しくてもダメだし、見てる人のためにやってもダメ。そこの比重が大事」と言っていて。私もそれをいつも意識しています。

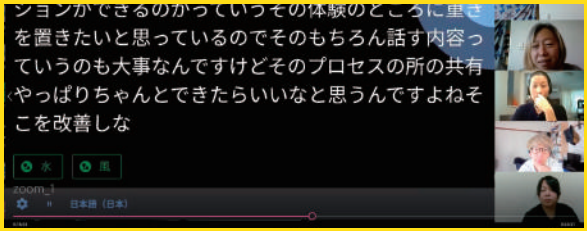
COLUMN

「リサーチの記録」

様々なバックグラウンドを持つ人が関わるこのプロジェクト。心地の良い会議のスタイルも、参加する人々によって異なります。会議のやり方も模索しながら、それぞれにとって有効な手法を探りました。その記録を、まとめました。

会議方法：対面

5月。まだ緊急事態宣言中。会議出席者は全員、自転車で、スタジオ・長田教坊に集合。パク・趙ファミリー、アラン・松縄ファミリー、ファン・横堀ファミリー、dB文、そして各々の子ども達。計11名。入り口の扉を少し開けて換気をしながら約１時間。話題は、異文化が暮らしの中にある戸惑い、食文化、子ども達の国籍のことなど、この顔ぶれならではの内容が、あちこちに方向転換をしながら進みました。私のノートのメモには「文化のはざま・自分って何だろう」「対話のスタイルの発明」「そこで生まれてきた」「何気ない一言に支えられる」などが記載されています。



会議方法：Zoom

6月。視覚障がい者、聴覚障がい者も交えてのオンラインミーティングを実施。未だ、オンライン会議もさほど慣れていない中で、手さぐりで準備を始めました。見えない人にとって、オンライン会議はその空気感が伝わらず、とてもやりにくいとのことで、実来場とオンラインのミックスでの会議からスタート。聴こえない人にとっては手話通訳や字幕を入れつつも、誰が話しているか一眼でわかるように場を進めるなど、回を重ねるごとに会議の方法を学びました。

会議方法：サイレント

今年度最初の課題は、聴こえない人と手話のできない人のオンライン会議をどのように成立させるかということでした。インターネットで調べ、Androidの音声認識アプリを活用し、それをLet's Viewというアプリでデスクトップに同期させ、画面共有するという方法にたどり着きました。機材がうまくつながらない日もあれば、音声から文字への変換が過剰に誤認識する日も。Zoomのチャットでミーティングも試みましたが、書くことに集中すると、みんな下を向いていて、少し寂しい。後半、筆談をオンラインに持ち込むと、コミュニケーションが円滑になり、テンポと熱量が上がりました。会議の内容によって、手法を使い分けることが有効だと感じています。

会議方法：多国籍そうめん

7月。子ども達が寝っころがったり楽に過ごせるように、dB文の自宅の2階で実施。会議出席者は、趙恵美さん、松縄春香さん、dB文、私、そして子ども達。5月の会議で話題に挙がった「食文化」を切り口に企画をつくりたいと思い、いろんなルーツにつながる家庭の「おうちごはん」のレシピを教えてもらいながら、一緒に調理し食べて話すような会はどうかと考えていました。私たちは、朝から集まり、話は尽きず、お腹もグーグー鳴り出して、昼ご飯でも食べようかと。手軽にできる素麺に。茗荷、ネギ、生姜、卵などが並んだテーブル。各々のお家の素麺で並ぶ食材を話して、大層盛り上がりました。そこには、それぞれのルーツにつながる食材、調理方法も出て来て、食の入り口の射程の広さを実感。しかしながら、コロナ禍ゆえに、このアイデアは実現が叶いませんでした。

2021年2月7日(日)14:00-15:00

【MMF】オープニング

「MISCH MASCH Festival(以下、MMF)」は、当事業の２年目のプログラムとして、オンラインの場が劇場になって、ダンス・トーク・演劇・音楽・まち歩きなど、いろんなプログラムを２週間にわたり配信しました。
フェスティバルのオープニング・プログラムは、森田かずよ(当事業の一年目の数多くのプログラムに参画／義足のダンサー)、地域のおじさま達による合唱団「ビッグ腹ダイス」のパフォーマンスによって幕明けました。その後「ビッグ腹ダイスと語る～震災と共生 そして これから～」のトーク・プログラムを行い、防災の視点から「共生すること」について語り合いました。

MC：ミッシュマッシュムッシュ高橋、趙恵美
歌：ビッグ腹ダイス(中谷紹公、綿貫功一、衣笠宥清、山本豊久)
ダンス：森田かずよ
トーク：ビッグ腹ダイス

トークより抜粋

山本：(震災の経験を経て、いろんな人が住みやすい地域にするために取り組んでいることとして)約800人の方に参加していただき大々的な「避難シミュレーション」を行いました。なかなか全員網羅することは難しいですが、避難に支援が必要な人と、支援する人を、各自治体でマッチングする試みも行いました。

中谷：マンションからの避難をサポートするのが何箇所あるかを想定し、実際にお年寄りをおんぶして行いました。大変でしたね。訓練でさえみんなパニックになっていたので、その中で本当に地震が起こったときにどのように情報を発信するのか考えないといけないと実感しました。一つの逃げ道ではダメだと痛感しています。

横堀：防災は、まちのみんなでやる必要があるということですね。

中谷：絶対そういうものです。

レクチャーより抜粋

ゲルダ：私たちの活動は、障がいを持つ持たないに関わらず、同じように接して、レベルの高いダンサーを目指してトレーニングしています。

ギッタ：国内外問わず、私たちはいつも芸術的なことを原動力として作品を制作しています。Mixed-Abled Danceは、見せること自体に意味があると思っています。作品を披露し続けることで、いずれMixed-Abled Danceというラベル自体が必要なくなり、(特別なものではなく)普通になると考えています。

M.A.D.E.プログラムの紹介ビデオより：どんな身体や身体能力を持っていようと、自分の限界に挑戦したら、他の身体性を持つ人では決して達成できないパフォーマンスができます。…(中略)…(限界に達した時に) その限界にイライラするのか、自分で解決策を見つけるのか、独自の芸術的な意味を見つけ、その限界に立ち向かうのか。思い込みや構造を壊さないと、ダンスを今の形から次のレベルへと発展させることはできないでしょう。重要なのは、身体が持つ多様性なのです。

2021年2月9日(火)19:00-21:00

【MMF】身体的な差異を越えたM.A.D.E.プログラム(独)について

DIN A 13(ディナ ドライツェーン)は、ケルン(ドイツ)を拠点に世界で活動を広げる、Mixed-Abled(障がいのある人もない人も一緒に活動する)ダンスカンパニーです。主宰・振付家・ダンサーのGerda König(ゲルダ ケーニッヒ)とメンバーのGitta Roser(ギッタ ローザ)から、カンパニーが生まれた経緯や、活動を広げるプロセスについてお話しいただきました。後半では、2019年から始まったプロフェッショナルなダンス・アーティストの独自の育成プログラム「M.A.D.E.プログラム」についてお話いただきました。

レクチャー：Gerda König(ゲルダ ケーニッヒ)、
Gitta Roser(ギッタ ローザ)
Zoom参加：藤野一夫(神戸大学大学院国際文化学研究科教授)、
岩淵多喜子(Dance Theatre LUDENS)、
森田かずよ、庄波希(HIxTO)

2021年2月10(水)19:00-20:15

【MMF】Thikwa+Junkan お久しぶりトーク

「劇団Thikwa(ティクバ)」(ベルリン)、「循環プロジェクト」(DANCE BOX)は、障がいのあるなしの境界を超えて、舞台表現と向き合ってきた団体です。2009年～2012年にわたり、ベルリンと神戸を行き来しながら、共に作品をつくり上演しました。今回、9年ぶりに画面越しに再会し「お久しぶりトーク」を行いました。コロナ禍におけるそれぞれの近況を報告することをきっかけに、現在考えていること・取り組んでいることを話しました。来年で10年目。10年を経て、再び協働したいと思った一時間強でした。

出演：砂連尾理、中島那奈子、望月茂徳、カロル・ゴレビオウスキ、
ニコ・アルトマン、ゲルト・ハルトマン、福角宣弘、福角幸子、
西岡樹里、星野文紀

2021年2月12日(金)21:00-21:30

【MMF】視覚ラボ

武内美津子さんと出会った初日は、一緒にお好み焼きを食べ、韓国舞踊のクラスに参加してみる、というところから始まりました。2度目は、振付家の紅玉さんと時間をかけての対話。武内さんにとっては未知のダンスの世界。紅玉さんにとっては見えない世界という、お互い知らない世界を知っていく時間が始まりました。言葉やイメージからの振付け、それに対して更なるダンサーからのアプローチが往来し、『透明色の器』というダンス作品が完成。MISCH MASCH Festivalにて舞台映像を配信しました。音声ガイドも本人が担当。どのような音声ガイドがあれば、見えない人がその舞台をクリアにイメージできるのか等、深く協働しました。

ダンス：武内美津子　振付：紅玉　音楽：江南泰佐
ラボ・メンバー：稲吉、中島由美子

2021年3月27日(土)13:30-15:30

マルジナリア
「目を閉じて。ときの音遊歩」

奈良・やすらぎの道にて開催された、パフォーミングアーツのイベント「マルジナリア」との協働プログラム。『透明色の器』の音楽を担当した江南泰佐さんと、武内美津子さんによるナビゲートで、色や形、においや光、まちの記憶を一緒に探しながらゆったりと散策しました。神社の砂利を裸足で歩く、光を感じる、水路の音に耳を傾ける、樋の音を聴いてみる、瓦のデザインを触ってみる、電信柱のパイプの合奏など、普段見ている風景でも気づいていない音や感覚、そしてその場所のはるか古の息づかいまでをも参加者で共有する豊かな時間となりました。新長田から他地域へ、小さな気づきの種まきプロジェクトが始まりました。

ナビゲーター：江南泰佐、武内美津子
共催：きーなじっけんしつ
会場：奈良・やすらぎの道界隈

COLUMN

「今回の試みについて思うこと」

武内美津子

今回、企画から携わり、私自身、自らに潜んでいた可能性を発見しました。また、目を閉じて、触感と直感など感覚を駆使したり、参加者にも同様の体験をしていただいたことで、自分を切り開いてゆくことが、みんなの未来を開いてゆくことだと痛感しました。

体感し体験してこそ、人は腑に落ちることができ、心が動いてこそ、人は行動に移すことができるものだと思いますので、障がい者自身が企画から携わり感覚や感性を揺さぶる芸術を通して共生社会の実現を図った「視覚ラボ」の取り組みは、大変有効であることを確信しました。今後、持続的に行われることが重要で、それを強く望みます。社会から分断され孤立しがちな障がい者の境遇が、新型コロナ禍において、すべての人のものとなった今、その必要性の認識が高まり、大きな影響力を持つと思います。

2021年2月13日(土)11:00-12:30

【MMF】エレナの家族でワークショップ！

振付家/ダンサーのマ・エレナ・ラニオグは、フィリピンのマニラを拠点に活動しています。2010年2月に「KOBE-Asia Contemporary Dance Festival #1」での招聘をきっかけに、同年5月には約３ヶ月にわたって、DANCE BOXで滞在制作を行いました。以降、お互いの近況を報告し合いながら、ゆっくりとしたペースで繋がっています。

今回、エレナはパートナーのハーバートと一緒に、オンラインのダンス・ワークショップをナビゲートしました。前半はコロナ禍で編み出された触れないダンスの新しい方法を、後半はフィリピンの子ども達が踊る民俗舞踊に取り組みました。STAY HOMEで、子どもも大人も一緒にダンスを楽しむプログラムを提案しました。

ダンス・ナビゲーター：マ・エレナ・ラニオグ、Herbert Alvarez

2021年2月14日(日)11:00-13:00

【MMF】新長田の旧正月巡り

コリアン、ベトナムといった多国籍なルーツをもつ文化が混在する新長田。この街では、新暦・旧暦の二つの暦による祭事があります。2021年2月12日は旧暦のお正月でした。旧暦でお正月を祝う風習があるのが、コリアン、ベトナム、中国や台湾など。そこで、韓国伝統芸能を継承する「スタジオ長田教坊（ながたきょばん）」のパクウォン・趙恵美、そしてベトナム人のファン・チョン・クォンの各々の家庭におけるお正月の風景をライブ中継しました。

ツアーガイド：パクウォン、趙恵美、ファン・チョン・クォン、横堀ふみ

COLUMN

「長田らしい多文化共生の今とこれからに思うこと」

パクウォン

私が幼少期に過ごした長田（新長田）は、商店街にびっしりとお店が立ち並ぶ活気溢れるまちだった。それが阪神淡路大震災をきっかけにまちの姿は大きく変わっていった。かつて神戸で外国人といえば在日コリアン・中国の人が大半だったが、現在はベトナムの方を始め様々な国籍の人がこの長田に住んでいる。

小学生の時分、長田は近寄ってはいけないと言われる所だった。今ではその面影はすっかり身を潜めてしまっているが、今でもそんな話を聞く事はある。

しかし時と共に風景も移り変わり、人情溢れるご近所付き合い残るここが面白いと全国の方が移住を始めている。当時では考えられない事だ。

震災前の風景には戻る事はないが、まちには新たな風が吹いている。

2021年2月16日(火)21:00-22:00

【MMF】AZUMI PIANO @はっぴーの家ろっけん

ピアニストのAZUMI PIANO が、介護付きシェアハウス「はっぴーの家ろっけん」で2018年より継続している音楽活動に１日密着。はっぴーの家の共有スペースにて、入居者(認知症患者を含む高齢者)たちの記憶を巡るピアノ演奏や楽譜を使わないピアノ指導、音楽でつながる人々の姿や、インタビューを撮影し、短編のドキュメンタリー映像を製作しました。混沌とした空間に織り込まれる音楽の時間の中で浮かび上がる高齢者たちの表情から、コミュニケーションや共存することの新しい在り方や、その可能性を垣間見ることができました。

ピアノ:AZUMI PIANO　会場:はっぴーの家ろっけん

映像より抜粋

AZUMI PIANO:はっぴーの家に行き始めて、家族みたいに「よっ！また来たね！」と迎えられるようになってからがすごく楽しかった。ピアノは聴いても聴かなくてもいいし。私が媚びないというか、私だって聴きたくない時は聴きたくないし。たまたま聴けたら聴いてねってという状態を自分が作れるようになって。ピアノを弾いている時も、私が何かを演奏しているピアニストではなくて、あなたも私もここにいる。たまたま訪れた孫のような。

首藤:(聴く人と弾く人の)日常にシンクロしている感じがするよね。生活の中に音楽があると言っても、そこにピアノを演奏している人が来てくれるのじゃなくて、弾いてる人すらも、その人の日常としてここに来て演奏しているから。

AZUMI PIANO:ここで聞こえるのは、ピアノの音だけじゃなくて、(周りの音を指して)携帯の音や、スタッフの方が食事を作っている音。生活音を含めて一つの空間。ぐちゃぐちゃでカオスな感じ。自然体が良いなと思った。それが(ここに来るようになって)教えてもらったこと。

2021年2月17日(水)21:00-22:00
【MMF】視るダンス①

2021年2月18日(木)21:00-22:00
【MMF】視るダンス②

2021年2月19日(金)21:00-22:00
【MMF】視るダンス③

「MISCH MASCH Festival」を全てオンライン・プログラムに切り替えた時、“ダンス作品の上演を撮影した映像を配信する”という選択肢に加えて、“ダンス映像作品を配信する”案が出て来ました。作品の作り手は、全て「国内ダンス留学@神戸」卒業生によります。「国内ダンス留学@神戸」を経て、再び全国のいろんな場所に飛び立った卒業生たち。彼ら/彼女らは、現在、どんな活動をしていて、どのようなダンスへの眼差しを携えているのか、切り取りたいと考えました。そして、舞台でのダンス作品4作品と、ダンス映像作品の9作品を3日間に分けて配信しました。舞台でのダンス作品の上演は、作品制作の初期より、照明研究会と協働しながら進めました。身体と光、モノと光、空間と光と、複数の関わり合いのレイヤーが編み込まれ、上演に厚みが出てきました。ダンス映像作品では、ダンスが身体に紐づくものだけではなく、光や風景、そして暮らしのある瞬間のなかにも宿るような、様々な様相で切り取られていました。

松本鈴香『〆』(舞台作品)
ダンサー:松本鈴香、広浦百合子(映像出演)
映像撮影・編集:Yin-Han Zoe Yang
朗読:広浦怜子、広浦信子

武内浩一『動は静によって生じ、静は動によって準ず』(舞台作品)
作・構成・振付・出演:武内浩一
副音声:髙木晴香

住吉山実里+タム・ファム『in-』(映像作品)
作:住吉山実里+タム・ファム

島田真奈『Flow Away』(映像作品)
出演:島田真奈、西澤恭子、生田直美
撮影・編集:金子礼二郎
副音声:合田奈央

ながやこうた『アマオト』(映像作品)
作・副音声:ながやこうた

福森ちえみ『Maybe tomorrow is XXX.』(舞台作品)
振付:福森ちえみ
出演:織田駿、永田桃子
副音声:アルト

松縄春香『otolie』(映像作品)
作:松縄春香
副音声:筒井潤

木村玲奈『どこかで生まれて、どこかで暮らす』(映像作品)
作:木村玲奈
副音声:木村玲奈、木村修三

マリア・デ・ロス・アンヘレス・パイス
『A room inside mind.』(舞台作品)
振付:マリア・デ・ロス・アンヘレス・パイス
出演:こほりまなえ
副音声:こほりまなえ

助成:神戸市

2021年2月17日(水)21:00-22:00

大谷燠のお茶の間トーク①

大谷:音の出し方でどれだけ世界が広がっていくのかというお話がありましたが、ダンスも、あんまり色々と動かさなくても良いと思う時があるんですよね。シンプルな動きの中から生まれてくる隙間とか、空間の広がりというのは全部詰めてしまうと説明的になってしまう。そこに隙間を入れてやることで、広がりが出てくる。それが“間(ま)”なのかな。

パクウォン:そうですね、打楽器でも、早く多く打てば良いのかと言われたらそうでもない。いかに少ない音で“間”を表現するのか。手数が多ければ良いというわけではないので。音と音の間を聞かせたり、音を立体的に見せてあげるということは生徒さんにも伝えています。

お茶の間トーク:パクウォン(遊合芸能チングドゥル)、大谷燠

2021年2月18日(木)21:00-22:00

大谷燠のお茶の間トーク②

AZUMI PIANO:今回は副音声がついているバージョンを見ました。言葉がダンスについてくることで、言葉でも鑑賞したくなりました。まず暗闇で、言葉だけでダンスを想像してみる。その後に、作品を目で見て、「あぁ、こういう感じだったのか」と。その後に、副音声なしで見るという楽しみ方もできて面白いと思いました。

大谷:(映像作品を見て)ダンスは様々なメディアとミックスしています。ポジティブにいうと、表現が多様になっていますが、ネガティブにいうと身体性が失われているような気もします。しかし、(この作品が)そのような時代性を表現しているのであれば、そうなのかなと。

お茶の間トーク:AZUMI PIANO、大谷燠

2021年2月19日(金)21:00-22:00

大谷燠のお茶の間トーク③

田中:このような作品を見ると、「これはダンス作品です」といえば、それで作品として成立するような気もしたんですね。そんなふうに思っていいのでしょうか…(笑)

大谷:僕もそんな気がしていて。作家が「これがダンス作品です」といえば、それがダンス作品であると思いますし、それで良いと思うんですよね。コンテンポラリーダンスの表現の手法は非常に多岐にわたっていますから。

田中:(映像作品を見て)この作品をダンス作品として見られる方もいらっしゃると思うのですが、人によっては映像作品としても楽しむことができると思いました。それは受け手の自由だし、そこも混じってくると面白いと思いました。

大谷:映像とダンスと、往来するお客さんが増えて、両方楽しむ人が増えたら良いですよね。

お茶の間トーク:田中範子(神戸映画資料館)、大谷燠

COLUMN

「副音声の試みについて」

副音声という音声ガイドの導入を初めて行いました。
振付家の希望を聞きながら、副音声のテキスト作成と朗読する方を決めていきました。
作品を自分の手から切り離して捉える人、
作品の一部のテキストとして捉える人、様々なアプローチから取り組みました。

筒井潤

挿入される風景や音、抽象的な絵などのカットもダンスが生み出すリズムのように機能する映像だったので、言葉の意味をリズミカルに提供する工夫をしました。1カットの情報量が多い場合は、鑑賞者がイメージするのにかかる時間とカットの長さの一致を優先したので、映像の出来事よりも少し早く副音声の解説を入れた箇所もあります。全盲が先天性の方と後天性の方とでは、同じ言葉から受ける情報の質や量が異なることにも配慮しながらつくりました。

木村玲奈

副音声を副ではなく、作品を構成する音の一つとしました。撮影場所の環境音も使用し、副音声なしでも場の情景が障がいのある方に想像しやすいものにすることも大切なポイントでした。環境音から想起された景色に人の存在と物語を加える必要最低限の副音声テキスト2種類（父ver, 自分ver）を創作し、心地よく、生々しく、作品の中の場の情景や小さな物語が映像を見てくださる方の中に残るような時間を創ることを試みました。

こほりまなえ

作品コンセプトから、ダンサー（私）の内側で起こる感覚の変化を言葉にしました。視覚的な説明よりも内面的な動きを語ることで、観る人に、聞きながら身体を通して作品ダンサーと同じような感覚になってもらえるようにと狙いを込めて作りました。また、観る側の作るイメージに余白を作りたかったので、あまり説明しすぎず“ちょうどいい”具合を目指して語りました。少しでもダンサーが感じた身体の旅を言葉で届けられていたら嬉しいと思います。

髙木晴香

大事にしたことは、私が武内さんの作品を目で見た時と、耳で聞いたときの「後味」を同じにすることです。副音声を書き出す前に、この作品を見てどんなことを感じたり考えたりしたかを書き出し、そこから同じような後味を残せるようなテキストを作成しました。武内さんの動きを全て言葉で説明するのではなく、想像力を持たせる余白を残すことも意識したことの一つです。武内さんの作品の意図と離れすぎていないか、対話を重ねながら進めました。

2021年2月20日(土)14:00-17:00

【MMF】村川拓也『Pamilya(パミリヤ)』記録映像上映＋『Pamilya(パミリヤ)』をめぐるクロストーク

村川拓也演出の舞台作品『Pamilya(パミリヤ)』をArtTheater dB KOBEで上映しました。『Pamilya』はタガログ語で「家族」の意味。舞台上に、実際に介護士として働くフィリピンから来た女性が登場し、福祉施設の様子が舞台上で再現されます。観賞後は、演劇やダンスの実践者、新長田で高齢者介護やリハビリに関わる方々で、それぞれの経験や立場の視点から、クロストークを行いました。作品から浮かんだ発想や疑問を、それぞれの現場の経験談を交えて、改めて劇場という場で話し合いました。

トーク出演：
村川拓也(演出家・映像作家)、
長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院助教)
永田智子(新長田あんしんすこやかセンター地域支え合い推進員)
廣田恭佑(株式会社PLAST代表取締役)、中間アヤカ(ダンサー)

クロストークより抜粋

永田：介護保険の相談に乗るとき、自分の価値観を一旦置いて、フラットな状態で話を聞きます。その時になんとなく自分も演技してると思うんですよね。だから、介護の仕事って、結構アートだなと思うことがよくあります。

廣田：(登場人物の江藤さんに「叩かないでね」と声をかける場面に対して)それって何かしかのきっかけがあると思うんですよね。自分の意図が伝わらないとか、何かに対する抵抗じゃないと、そういう行為にならない。それを、「叩かないでね」で終わってしまっているのが引っかかっています。

中間：この作品の「本当のこと」と「嘘のこと」の境目が気になりました。さっきおっしゃっていた「叩かないでね」も、本当の現場だったら「叩かないでね」で終わってないはずで。その後のもっとたくさんのやりとりを知りたいと思いましたし、想像が膨らみました。

村川：このような場での声を舞台に取り込めないかとずっと思っていました。その人たちの考えを、劇場や舞台芸術の世界に引き込むには、何かしかのしつらえが必要だと思っていて。それは、舞台を盛り上げたいというよりも、自分自身も舞台を作る以外のいろんなことをやりながら生活しているから。

長津：生活の延長の場所として劇場を開いていくことで、今まで縦割りになっていて接点がなかったものに横串を刺すことができる。こんなふうに繋がっていくことが重要なのだと感じました。

2021年2月21日(日)14:00-15:30

【MMF】クロージング

新長田を中心に、独自の拠点を運営しながら表現活動を支援する人々の集合体「新長田アートマフィア」。MMFのクロージングは、新長田アートマフィアのダンス部による新作上演で幕を開けました。その後、アートマフィアの皆さんとトークを行いました。アートマフィアでは、福祉や教育、文化芸術など、様々な現場で活動している方々が、文化芸術を通してともに活動してきました。その中で見えてきたこと、気づいたこと、そして、コロナ禍を経て各々が考えていることやこれからの展望について思い思いに話しました。

MC：パクウォン、趙恵美、ミッシュマッシュムッシュ高橋
『分裂抗争のMOB』
出演：新長田アートマフィア ダンス部
岩谷一司、岩本茂、角野史和、合田昌宏、首藤義敬、高橋大輔、
高見大地、中元俊介、林政徳、吉川史浩、渡辺祥弘
台本・演出：目黒大路
クロージング・パフォーマンス『ソルチャング』：パクウォン、趙恵美

トークより抜粋

大谷：(アートマフィアダンス部を見て)本当に馬鹿馬鹿しいというか、可笑しくて、切なくて、アホらしい。地域の中で活動している大人たちが、子どものように舞台を共有している。

目黒：多文化共生って難しいと思っていて。自分たちが受け入れる範囲のものが「多様性」で、それ以外のものは結構弾かれているんじゃないかって。今後、そんな方たちとも何か一緒にできるまで活動を広げられたらすごく面白くなるんじゃないかと思います。

岩本：普段、高齢者の方と接していると、言葉だけではなかなか伝わりにくいこともあるんです。アートマフィアや演劇っていうのが、表現の幅を広げてくれました。

首藤：僕らの考える多文化共生って、医療や福祉関係者などの同業者ばっかりなんですよ。でも、まちにはもっといろんな人がいる。本来の意味での「多文化」をダンスボックスにぶつけていただいたと思っています。(中略)また、アーティストの手を抜かない仕事ぶりを見て、会社の研修でも、アートやダンスを取り入れるように変化していきましたね。

2月7日(日)14:00- 15:00内、2月10日(水)19:00 - 20:15内
2月12日(金)21:00 - 21:30内
2月17日(水)21:00 - 22:00内
2月18日(木)21:00 - 22:00内
2月19日(金)21:00 - 22:00内

耳からダンス

音声(音楽や声)だけによる「振付」を配信しました。STAY HOME中の家の中で、振付を聞きながらひっそりと自由きままに踊るイメージです。振付家は、テキストとダンスの関係性にこだわりのある、世代の異なる6名に依頼しました。長さは5分から10分程度の短編集です。

振付:山下残、内田結花、紅玉、増田美佳、山崎広太、yummydance

COLUMN

「踊ってみたレポート」

小堀結香(国内ダンス留学@神戸3期卒業生/岩手・西和賀町在住)

終わった直後、一緒に踊っていた娘(4歳)の第一声は「もう1回!」でした。

好きな食べ物を思い浮かべ、最後はそれになってみる…という内容も、ツアーガイドみたいなノリノリの言葉掛け(振付)で、楽しく想像を膨らませつつ自然と体が動いていきました。言葉をそのまま動作にしてもいいし、聞きながら自分で何かルールを加えてみたり、楽しみ方が色々ありそうだと思いました。

はじめは、娘には難しいのでは?飽きるんじゃないか?と心配でしたが、リズムに合わせて踊るのが苦手な娘には、ちょうど良かったのかもしれません。「私はこう!お母さんは?」「一緒にくっついてやって!」とお喋りしっぱなしでしたが、一生懸命踊っていました。

「MISCH MASCH Festivalとは」

昨年度は、劇場の内外で"場"を持って進めていたこのプログラム。しかし、今年度は新型コロナウィルス感染症の影響で、従来のように集まることが難しくなりました。そこで、私たちの今年度の活動のプロセスや今後の展望をオンラインフェスティバルという形で配信しました。MISCH MASCHとは「ぐちゃぐちゃである」という意味。「おどる」「みる」「つながる」「しる」をテーマに番組を企画しました。2月7日(日)〜2月21日(日)の間、月曜を除き毎日プログラムをDANCE BOX公式YouTubeチャンネルで配信し、2月いっぱいまでアーカイブを公開。オンラインの強みを生かし、新長田をはじめ、全国や国外とも繋がりながら、対話や出会いのきっかけをつくりました。

照明:三浦あさ子、茂木紀恵、青山愛
音響:西川文章
舞台監督:小林勇陽
写真:岩本順平
映像撮影・編集:SAKAZUKI Production
(池田浩基、阪下滉成)、大里健太郎
配信:株式会社パルテック・プロダクツ、角野史和
手話通訳:久保沢香菜、三田宏美、加藤真紀子
通訳:可世木裕子、益田さち、山口惠子
協力:アート補聴器「十彩」、
一級建築士事務所こと・デザイン、
一般社団法人Water Ground Mountain、
一般社団法人手話エンターテイメント発信団oioi、
医療法人社団十善会グループ野瀬病院、
株式会社PLAST、
クリエイティブ・アート実行委員会、K+action、
新長田あんしんすこやかセンター、
スタジオ長田教坊、はっぴーの家ろっけん、
福祉事業型「専攻科」エコールKOBE、LangToi、他
スタッフ:大谷燠、文、横堀ふみ、田中幸恵、新家綾、
髙木晴香、飯川恭子、中島由美子

CALENDAR

タイトル	開催日 (赤字はオンライン開催)	MMFでの配信日
会議形式:対面		
会議形式:Zoom		
会議形式:サイレント		
会議形式:多国籍そうめん		
大人からはじめるバレエ<女性限定>	2020年6月よりスタート	
【Let's Dance with Sokerissa!】映画「ダンシングホームレス」上映会	8/12	
子ども・はじめてのバレエ	8/29	
はじめての西アフリカの伝統舞踊	8/30	
はじめての韓国舞踊	9/1、9/15、10/13、10/27、11/24、12/1、12/15	
大人からはじめるヨガ<女性限定>	9/1、9/15	
劇場へようこそ！２０２０～ドント・ストップ・ダンシング編～	9/17	2/13
やさしいコンテンポラリーダンス	10/4、10/18、10/24、11/8、11/21、11/29、12/13、1/17、1/31、2/11、2/28、3/14	2/11
サイレントシアターこと始め 第一部:「SHUWACHAN BARRIER CRASH」上映 第二部:Let's TRY!サイレントなトークディスカッション!?	10/17	
インクルーシブ・ダンス・ワークショップを考える～イギリスでの実践から～	1/15	
ソケリッサと踊ろう！Dance Workshop with Sokerissa	1/24	
【MMF】オープニング		2/7
【MMF】身体的な差異を越えたM.A.D.E.プログラム(独)について		2/9
【MMF】Thikwa+Junkan お久しぶりトーク		2/10
【MMF】サイレントシアター「ミル+オドル=ココロオドル」		2/11
【MMF】視覚ラボ		2/12
【MMF】エレナの家族でワークショップ！		2/13
【MMF】新長田の旧正月巡り		2/14
【MMF】AZUMI PIANO@はっぴーの家ろっけん		2/16
【MMF】視るダンス①＋お茶の間トーク		2/17
【MMF】視るダンス②＋お茶の間トーク		2/18
【MMF】視るダンス③＋お茶の間トーク		2/19
【MMF】村川拓也『Pamilya (パミリヤ)』記録映像上映 ＋『Pamilya (パミリヤ)』をめぐるクロストーク		2/20
【MMF】クロージング		2/21
【MMF】耳からダンス		2/7、2/10、2/12、2/17、2/18、2/19
マルジナリア「目を閉じて。ときの音遊歩」	3/27	

ぐちゃぐちゃ の ゴチャゴチャ

こんにちは、共生社会

主催：文化庁、NPO法人DANCE BOX

企画制作：NPO法人DANCE BOX